

# 信濃奇勝録 卷二

天保五(1834年)脱稿。井出道貞著。明治十九年刊。

## 戸隠山

奥院おくのいんハ本社たちからをのみことく手力雄命づりう九頭龍権現かんくつハ地主神かにて巖窟からすの中に在を每夜米一舛かし三合しんくを炊かき一舛しんくハ神供かとし三合からすハ鳥をの飼をとすより

此所此所に二羽に二羽の鳥ありの鳥ありさくはうねん中院ぼうしやより三十町坊舎さとはう十二坊ありといへとも一月の内やくそ朔望さくはうねん念八日此三日の外ハ戸さくはうねんさして里坊さくはうねんに住さくはうねんす神厨所さくはうねんに役僧さくはうねん

の住するのみなり中院ひくの比丘尼石ひくより女人きんを禁きんず(以下割注)  
此比丘尼石によそうしひといふハ昔女僧強によそうしひて登山によそうしひし此所おもひかねのみことにて石おもひかねのみことと成おもひかねのみことしと云傳おもひかねのみことへて

今一字おもひかねのみことを立て女人堂おもひかねのみことといふ(以上割注)中院おもひかねのみこと本社おもひかねのみこと思兼命おもひかねのみこと別當所おもひかねのみことこ

の地へたにあり天台勸修院くわんしゆいんけんくわうじ顯光寺うははるの坊舎すべ二十四坊すべ宝光院すべハ十二町すべ隔すべる本社すべ表春命すべ坊舎すべ十七坊すべ総すべて五十三坊すべなりしか近年すべゆる

ゑありて宝光院すべ十七坊すべ減すべじ中院すべより十二坊すべ此すべに移すべ轉すべし三所すべと  
もに十二坊すべつゝ都すべて三十六坊すべなり領千石すべ余祭礼すべハ中院すべ七月すべ  
八日宝光院すべ同十日奥院すべハ同十五日すべにて三日すべともに同式すべなり

拾芥抄しふかいせうに戸隠山けん顯光寺えんのきやうじやハ古佛遊行えんのきやうじやの所えんのきやうじやとあるハ役行者えんのきやうじや九頭えんのきやうじや  
龍権現ふうを封ふうすといひ行基菩薩ふう弘法大師ふう等の旧跡ふうをいふ故ふうな

るへし又繼元年中親鸞上人此地に百日參籠の内一日一枚  
ツゝ自筆の佛名号百枚有しが過半火災にかゝりて失たり中  
院の行勝院其旧跡也又佛像を刻して宝光院へ奉納有これを  
雲座の弥陀と云又或時おぼろなる月のさしのほりたるをみ  
て詠し給ふと云哥あり

戸かくしの杵間に月のうつらふハ心の玉をみかけとそ  
思ふ

山中になきの松万年くさといふものあり

なぎの松五葉の這松を云 萬年松まんねんぐさ (以下割注) 杵苔のことくにして

枯乾こかんに及ふといへとも水中にひたせば生かへる高野山奥の院

にも有よし五雜俎ニ曰楚中有二万年松一長二寸許葉ハ似二側柏ハカリ コノチカシハニ

一藏ハコノニ篋笥中ニ一或ハサミ夾サウシ二冊子ノ内ニ一經ヘテレ歳ヲ不レ枯取置ニ沙土中

ニ一以レ水澆ソツケハレ之ニ俄頃復活不レ知ニ其従テ出ニハカニ一或イキカヘルハ云是レ老苔ノ

変シテ成ルト (以上割注)

中院に鬼女紅葉か毛とて色紅黒にして縮ちぢみたる毛あり長

サ五六尺はかり丸く輪わとなして壺中こちゆうに納む

和漢三才圖会ニ云下総国豊田郡石下村東弘寺ノ什物ノ中ニ有ニ七

難之揃毛さゝケ一色五采ニシテ長四尺有余未タレ知ニ何物ノ毛一也相傳江

州竹生嶋信州戸隠山ニモ亦有レ之而為ニ什物一往古有ニ異婦一名ニ

七難ト一人ノ陰毛也蓋シ塵塚物語ニ載ス竹生嶋七難之毛ヲ一矣

是亦以ニ鮮ケモノノタマ答一為ニ宝玉ト一之類但喜フニ奇品ヲ一而已云と鮮

表山おもてに三十三の巖窟あり各岩の形によりて名あり百間長屋

といふハ通りぬけの岩屋也又塔か谷といふ所に三重の石浮せきふと

圖あり高さ幾キといふ事をしらす其側に旗鉾と云岩あり数

十きつりつ屹立して塔の上に横たはる裏山にも許多の窟あり大日

か嵩たけ迄七里と云先中院より一の不動まで二里半それより劔けん

が峯へ一里半程のほる一の不動より所々に十三佛の石小堂せきせうだう

あり此劔が峯と云ハ群山の中にも秀て雲の上に真壁なす峯まかべ

なれハ遠方をちかた迄も見え渡るといへとも足戦そのき目くるめき心も

消るはかりにて見もやられず岩に取りつきをひ這松にすがり

匍匐はらばひて下りて百

(戸隠山全図二頁 名称のみ掲げる)

戸隠山 高妻山 劔力峯又アマミタカミネ 七り松 中院

大日 大日 奥院 宝光院

(図終わり)

杖の瀧あり夫より大日の鳥井とて五杖はかりの石門あり(以

下割注) 頂いたゞきの石梁長二十七步径十一歩と云せきりやう(以上割注) 玆こゝを過すて

水晶の塔と云あり遙の崑頭人倫の通路ならさる所なり又千

の瀑布たきあり七里松といふハ四十丁餘牛馬の背せの如し左右

の谷より五葉の延松はひしけりて枝は藤蔓ふじつるの如く根もなく末うらも

なし俗わくに七峯七谷なべに茂延わんといふ此うへを過はびこるて小池といふ清

水の湧池わくあり爰こゝに鍋茶碗等なべ有此水わんを温あたゝめて食しよくを調とくなふ大日巖がんハ

曼陀茶羅岩まんただらいはとも云五まんだ杖だらいはばかり裏うらに方八尺はくせきやうの白石鏡はくせきやうあり表ハ

粉壁しらかべの如し両界りやうかいの曼陀羅ざうをあらハす故がいがんに両界山へたてといふ大日

の像ぞう二体たいあり其地がいがんハ崖岸がいがんさがしく人の通路へたてなし谷へたてを隔へたてて大

日の礼磐ぼんと云所のぼへ上まうりて詣さんきづ常まうに山氣立さんきこめて靄もやふかし朝

日夕日にじにハ五色にじの雲虹にじの如く山中にじ金色にじの光にじ有にじ六月朔日にじより

導者だうしやに随とをりて登こうている沢通とをりと云ハ行程こうてい二十里餘こうてい故こうていに山中こうていに二夜三

夜ぞうしやうぞうらんきを明すくれす層嶂こゝ層巒きわう奇巧きわう又勝こゝたり此こゝに木王きわうという有こゝ是こゝハ比類

なき檜ひのきの老木ひのきにて高さひのきハさばかりに高ひのきからすといへとも圀かこみ

ハ三十六尋ひろと云今過半くわはん枯朽こきうに及そんて東南そんの一枝そん青葉そんを存そんする

のみ世まれに希まれなる大木まれなれハ俗まれに木王まれと稱まれす

山中あぶきに木曾殿あぶき安吹あぶきといふ大なる岩室かんしつあり径わたり八十間奥わたりの深わたりさ四十

間みつぱち其前みつぱちに自然石みつぱちにて方六尺みつぱちの水盤みつぱちあり此洞上みつぱちに流みつぱちあり此水洞口みつぱち

間其前に自然石にて方六尺の水盤あり此洞上に流あり此水洞口

に落<sup>れん</sup>て簾<sup>れん</sup>をなして水晶の如し依<sup>す</sup>て水簾<sup>すゐれん</sup>の滝と云鬼谷子<sup>きこくし</sup>か水簾洞<sup>すいれんとう</sup>  
も想像<sup>おもひやう</sup>れたり信府<sup>しんぷ</sup>統記<sup>とうき</sup>に木曾義仲<sup>きそぎちゆう</sup>の二男<sup>にゆう</sup>後に原信濃守<sup>はらのぶのぶ</sup>義重<sup>ぎじゆう</sup>と云  
し人義仲<sup>ひとぎちゆう</sup>討死<sup>とうし</sup>の時ハ幼少<sup>ちゆうせう</sup>也樋口次郎<sup>ひぐちじらう</sup>手塚太郎<sup>てづかたろう</sup>供<sup>ひ</sup>して此<sup>こゝ</sup>辺<sup>へ</sup>に落<sup>お</sup>下<sup>ろ</sup>  
り鬼無里<sup>きなし</sup>安吹屋<sup>あふきや</sup>と云所<sup>ところ</sup>に忍<sup>しの</sup>びて後大塩村<sup>おほしほむら</sup>に城<sup>しろ</sup>を構<sup>かま</sup>へて居住<sup>きゆうじゆう</sup>す是<sup>こゝ</sup>を王<sup>わう</sup>  
野田殿<sup>ののたのどの</sup>と稱<sup>なづ</sup>せり<sup>云々</sup>

註 「近代デジタルライブラリー」に明治二十年井出通  
発行の画像がある (DOI 10.11501/765065)。15'  
16' 17' 18コマ目。「新編 信濃資料叢書」第十三  
巻にも翻刻がある。